

応援、母ちゃん！ 23

～パンと本と、そしてバラを——バケットリストを叶えた母子旅の記録～

たまむら ふみ

玉村 文



はじめに——バケットリストの終わりに見えた「始まり」

「人はパンと本とバラが必要」という言葉が心に残っています。
この意味は、パンは生活の糧、本は心の糧、そしてバラは美や喜びの象徴。

私は長い間、このうちの「パンと本」で生きてきたように思います。仕事や学び、日々の生活。どれも必要で、大切で、誇れるものでした。けれど、いつのまにか「バラ」への出費——心を満たすための時間や経験——を後回しにしていたように思います。

子どもを育てるようになって、気づきました。お金を「モノ」ではなく「体験」に使うことで、家族の中にはあたたかい記憶が積み重なっていく。そのことが、私自身のウェルビーイングを大きく高めてくれる。

そんな「バラのようなお金の使い道」を、少しずつ見つけられるようになってきました。

この原稿では、2025年のバケツリストに書いた「母子旅に行ってみたい」という願いを叶えた記録をお届けします。

終わりに書いた「叶えられた喜び」を先に少しお話しすると——それは、忙しい日常の中で「やりたい」と思う自分を信じ、少しの勇気で動き出した先にあった、ささやかな奇跡のような時間でした。

1. 「母子旅に行きたい」—リストに書いた小さな願い

私の手帳には「やりたいことリスト」、いわゆるバケツリストがあります。

死ぬまでにやりたいことを、思いつくまま書き留めているノートです。

今年の手帳には100個書き出せるようになっていて、「Da-iCEのライブに行きたい」「万博に行きたい」などの項目に混じって、53番目に書いていたのが「母子旅に行きたい」。

この言葉を書いたときの私は、末っ子がまだ1歳。

「そんな余裕あるかな」「いつかできたらいいな」と、どこかで諦めながらも書き留めていました。

でも、書いておくと、心がその方向を向くのです。

そして2025年秋、ついにその願いが形になりました。

2. きっかけはオンラインコミュニティ「MIRAI'S」

2024年度に参加していたオンラインの育休コミュニティ「MIRAI'S」。

全国の同世代のママたちが集まり、子育てや働き方を語り合う温かな場でした。

「いつかリアルで会いたいね」——そんな声から生まれたのが、伊豆高原での一泊二日のリアル会。

関東や九州のメンバーも集まると聞き、思いきって「行ってみよう」と思いました。

仕事の都合で土日は難しかったので、前乗りの金曜から土曜の一泊二日に。
子どもたちも保育園児なので、平日を休ませることに大きな抵抗もありません。
「来年には小学生になるから、今しかないかもしない」——そう思ったとき、行動の
スイッチが入りました。
「もうこんな機会はないかもしない」という“貴重さ”は、私の原動力になるのです。

夫は今回は不参加。
でも、「一人時間ができるなら残業したりゆっくり過ごせるね」と伝えると快く送り出して
くれました。
そうして、約 2 か月前にホテルを予約。準備が始まりました。

3. 出発までの道のりと、小さな工夫

未就学児 3 人を連れての母子旅。
「大丈夫かな」という不安はもちろんありました。
けれど、計画と準備を丁寧に進めることで、心の余裕を保てました。

- **新幹線の指定席を事前予約。**
3 日前から空席を確認しつつ、最終的に前日にチケットを確保。
当日の体調不良リスクを見越してギリギリまで様子を見ました。
- **スーツケースではなくベビーカーを優先。**
大人 1 人なので、荷物はできる限り軽く。服やおむつは圧縮してバックパック
に。
1 日目の服は「捨ててもいい服」で気軽に。
- **「行けたら行こうね」と伝える。**
子どもたちには直前まで確定しないことを伝えておき、
行けたときの喜びが倍増するようにしました。

結果的に、誰も体調を崩すことなく出発できたのは、本当に奇跡のようでした。

4. 母子旅のハイライト

出発は京都駅。新幹線「ひかり」と「伊豆踊り子」を乗り継ぎ、約 3 時間半の道のり。
子どもたちは新幹線を見るだけで大興奮。

車内では、テーブルでお弁当を食べたり、タブレットでゲームをしたりしてご機嫌でした。

現地のイベントは、親子50組が集まるにぎやかなリアル会。

「ボヨヨン行進曲」や「それもいいね」など、Eテレの名曲をダンスする時間もあり、子どもたちの笑顔があふれていました。

久しぶりに再会した仲間たちとの時間は感動そのものでした。

「包み込まれるような雰囲気は変わらないね」と言ってもらえた言葉が、心に残っています。

夜はホテルの家族風呂でゆったり。

おむつの子も一緒にに入る温泉で、肌も心もリフレッシュ。

「この時間のために来たんだな」と感じるほど、静かな幸福感に包まれました。

5. あえて“諦めたこと”

もちろん、完璧な旅ではありません。

いくつか、手放したこともありました。

- **写真を撮ること。**

両手がふさがる母子旅では、シャッターチャンスより「今ここ」を優先しました。
でも、レストランでお店の方が撮ってくれた一枚が、宝物になりました。

- **ゆったり移動。**

次男が歩きたがるので、座席指定のチケットは購入していたけれど、ほとんど立ったまま。

それでも安全に目的地に着けたことが、何よりの成果。

- **節約より安心を選ぶ。**

「最安値」ではなく、「迷わず動ける」ことを優先。
タクシーを使う、チケットは早めに押さえる——そんな“保険としてのお金の使い方”を選びました。

この「諦め」もまた、ウェルビーイングの一部だったと思います。

6. 終わりに——人生の「バラ」を咲かせる

こうして、バケツリストの 53 番目「母子旅に行きたい」にチェックがつきました。
「Da-iCE のライブに行きたい」「万博に行きたい」など、他の項目も今年はいくつも叶いました。

実は、どれも一度は「無理かも」と思っていたこと。
第 3 子を妊娠したとき、「復職後は余裕なんてない」と自分で線を引いていました。
でも、書いておいた。
“書くのはタダ、本音だから”。

そして不思議と、機会が訪れたのです。
万博はチケットを譲ってもらい、ライブはリセール枠で奇跡的に入手。
「行けない」と決めていた頃には見えなかった道が、「行きたい」と思った瞬間に開けました。

バケツリストに書くことは、「願いを行動に変えるスイッチ」を押すようなもの。
やりたいことを可視化し、実行すると決めて動く。
それが、人生のバラを咲かせる力になるのだと感じました。

散財に見えるかもしれません、すべて予算内。
「自分の心が満たされること」に使うお金は、後悔ではなく充実を残してくれます。

今回の母子旅は、未就学児 3 人を育てながら働く母として、
「好きややりたいを諦めない」という小さな挑戦の記録です。

パンと本で生きてきた私に、バラをくれた旅でした。